

平成31年 3月29日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 石川県金沢市角間町  
管理機関名 国立大学法人金沢大学  
代表者名 学長 山崎光悦 印

平成30年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

1 事業の実施期間

平成30年 4月 2日(契約締結日)～平成31年 3月29日

2 指定校名

学校名 金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校  
学校長名 山本吉次

3 研究開発名

北陸からイノベーションで世界を変えるグローバル・リーダーの育成

4 研究開発概要

本年度も引き続き、Ⅰ一貫した課題研究カリキュラムの改善、Ⅱ外部資源活用方法の改善、Ⅲ教科のSGH化の改善を進めた。Ⅰでは、1年生実施「地域課題研究」、2年生実施「グローバル提案」、3年生実施「グローバル・キャリアパス」について、指導方法、評価方法を改善した。Ⅱでは、「地域課題研究」で北陸財務局を始め、地域の各種企業の協力を得、それらに向けての提案を充実させた。また、「グローバル提案」では外務省・農林水産省・大使館・諸国際機関・諸民間企業の協力を得ることができた。Ⅲでは、「教科のSGH化」を進めるためのコンピテンシーについて研究した。

これらにより「地域から世界へと発展する一貫した課題研究カリキュラム」を完成させるとともに、SDGsの研修を実施し、次年度からの新しい「グローバル課題研究」の試みに向けて準備を進めた。

今年度は、研究開発の5年間の成果を踏まえ、北信越SGHフォーラムを主催。北信越の指定校及びアソシエイト校の探究活動の取り組みと成果を、広く教育関係者に向けて発信した。

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
事業の管理	←											→
成果の普及								○	○	○		○
申請校に対する支援	←											→

(2) 実績の説明

(2) - 1 対象生徒

本校 SGH は、全校生徒 372 人を対象として実施した。

	1 年生	2 年生	3 年生	合 計
クラス	3	3	3	9
在籍数	120	125	127	372

(2) - 2 事業の管理

管理機関である金沢大学は、全学組織の「グローバル人材育成推進機構」(機構長：学長)に設置した「SGH 特区教育センター」(センター長：教育担当理事)の下、「SGH プログラム運営委員会」及び「運営指導委員会」の両委員会を通じて事業を推進した(図 1 参照)。平成 30 年度は、SGH プログラム運営委員会を 1 回、運営指導委員会を 2 回開催した。また、金沢大学の第 3 期中期計画において「高等学校におけるスーパーグローバルハイスクールカリキュラム研究等、特色ある先導的・実験的な教育活動を展開」と掲げる等、SGH 事業を重要な施策として位置付けた。

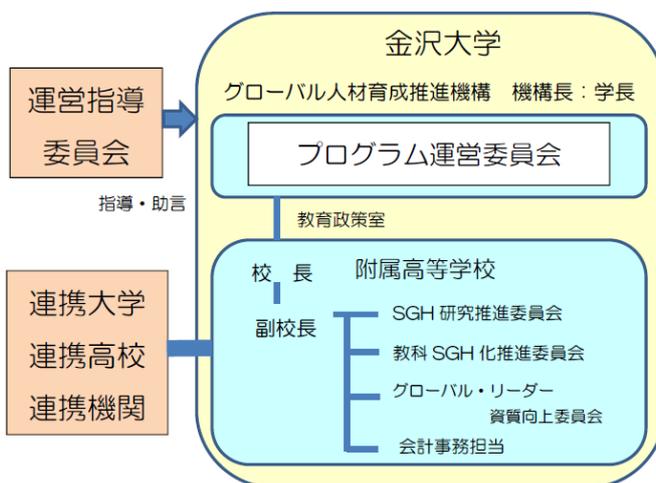


図 1 管理機関組織

平成 30 年度運営指導委員会およびのプログラム運営委員は、以下の通りである。

平成 30 年度運営指導委員会

所 属	職 名	氏 名
金沢学院大学	名誉学長	石田 寛人
金沢商工会議所	副会頭	中島 秀雄
筑波大学教育学域	教授	藤田 晃之

平成 30 年度 SGH プログラム運営委員会名簿

委 員	所 属・職 名	氏 名
センター長	理事 (教育・法科大学院強化担当)	柴田 正良
センター長代理	人間社会学域学校教育学類附属高等学校・校長	山本 吉次
	学校教育学類長 人間社会学域学校教育系・教授	守屋 哲治
	附属学校統括長 人間社会学域学校教育系・教授	鷺山 靖
	人間社会学域学校教育学類附属高等学校・教頭	高橋 栄一
	人間社会学域学校教育学類附属高等学校・教諭	塚田 章裕
	人間社会系事務部・部長	上地 進

平成30年度 金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高校 SGH 名簿

委員	校務分掌	教科	主な分担
◎高橋 栄一	教頭, SGH 研究推進委員長	地歴	総括, 地域課題研究, グローバル提案, グローバル・キャリアパス, ACCU, SDGs パートナーズ
山本 吉次	学校長		グローバル提案,
塚田 章裕	研究企画部主任	地歴	総括, 地域課題研究, グローバル提案, グローバル・キャリアパス (北陸財務局, 日本政策金融公庫)
荒納 郁美	研究企画部副主任, 1年担任	英語	地域課題研究, 加賀現地学習, グローバル課題研究
前田 健志	1年担任, 生徒部	公民	地域課題研究, 加賀現地学習, グローバル課題研究 ACCU, (北陸財務局, 日本政策金融公庫)
渡會 兼也	1学年主任, 進路部	理科	地域課題研究, 加賀現地学習, グローバル課題研究
外山 康平	1年副担任, 教務部	数学	地域課題研究, 加賀現地学習, グローバル課題研究 グローバル提案,
岡 かなえ	2年担任, 研究企画部	国語	グローバル提案, 東京現地学習, グローバル・キャリアパス, SDGs パートナーズ, スコラ, SGH 甲子園
戸田 偉	2学年主任, 進路部	数学	グローバル提案, グローバル・キャリアパス
丹内 周子	2年担任, 生徒部副主任	保健体育	グローバル提案, グローバル・キャリアパス
川谷内哲二	3学年主任, 進路部	数学	グローバル・キャリアパス
山本 潤平	3年担任, 進路部	保健体育	グローバル・キャリアパス
真木 啓生	3年担任, 進路部	英語	グローバル・キャリアパス
酒井 佑士	教務部情報係	数学	情報・ホームページ係, グローバル提案
島村潤一郎	進路部主任	国語	グローバル提案
金森 久貴	研究企画部, 3年副担任	国語	グローバル提案
横野 健二	教務部主任	英語	グローバル提案
宮崎 嵩啓	生徒部, 2年副担任	地歴	地域課題研究, グローバル提案
深田 和人	総務部主任	理科	グローバル提案
川崎 繁次	生徒部主任	保健体育	教育課程外の取り組み, グローバル提案
社谷内せな	生徒部保健係	養護教諭	グローバル提案

◎は委員長

(2) - 3 申請校に対する支援

SGH 事業遂行に際し、金沢大学は主に以下の2点について支援に取り組んだ。

- ①財政的支援：SGH 事業が円滑に推進できるよう、補助金のほか、金沢大学として年度当初から予算措置を行った。本経費は本年度の取組の「グローバル・ディスカッション」の留学生サポートスタッフへの謝金や、普及活動のポスターセッション・北信越フォーラムなどの大会運営費・会場設営費、本

事業を国内外へ周知するための英語版 Web ページの翻訳および研究報告書作成に係る経費等として使用され、補助金と併せて、事業の一層の充実に役立てられた。

②人的支援：金沢大学が幅広い研究者を擁する総合大学である強みと、50以上の国と地域から500名以上の留学生が学ぶ国際性豊かな大学である利点を生かし、次の人的支援を行った。

「地域課題研究」では、人間社会環境研究科担当の准教授が研究・指導助言を行った。また、金沢大学の留学生のべ55名が6回にわたる「グローバル・ディスカッション」に参加し、語学面だけではなく、外国人ならではの視点からの討論の深化や多様な文化に触れる機会を提供した。このほか、留学生の募集等に際し、所属部局担当の教職員が直接関与しスムーズな運営を実現した。

「北信越 SGH フォーラム」に関しては、金沢大学教授によるコンペティションの審査を実施、大学の施設設備の利用管理・大会運営に関して担当部署の職員が協力した。

#### (2) - 4 プログラム運営委員会・運営指導委員会の記録

① 平成30年度 第1回スーパーグローバルハイスクールプログラム運営委員会

日時：平成30年7月4日（水）9：00～10：05

場所：本部棟2階 第2会議室

出席者：柴田（議長）、山本、守屋、鷺山、高橋、塚田、上地の各委員

議事

##### 【協議事項】

(1) 平成30年度 SGH事業に係る実施体制及び内容

議長から、SGH事業に係る平成30年度の実施体制について説明があった。次いで高橋委員から、SGH事業に係る平成30年度の実施内容について説明があった。その上で審議を行い、原案の実施体制及び実施内容に沿って事業を進めることについて了承された。

(2) 平成30年度 SGH事業 地域課題研究の実施計画

高橋委員から、資料2に基づき、平成30年度の地域課題研究の実施内容及びテーマ案について説明があり、審議の結果、原案のとおり進めることについて了承された。併せて、テーマごとの訪問先等が決まり次第、必要に応じて各訪問先の長等に協力依頼を行うこととした。

(3) 第5回SGH 研究大会・第28回高校教育研究協議会の開催計画

高橋委員から、資料3に基づき、第5回SGH 研究大会・第28回高校教育研究協議会の開催計画について説明があり、審議の結果、原案のとおり進めることについて了承された。

(4) 平成30年度 第1回北信越SGH フォーラムの開催計画

高橋委員から、資料4に基づき、平成30年度 第1回北信越SGH フォーラムの開催計画について説明があり、審議の結果、原案のとおり進めることについて了承された。

##### 【報告事項】

(5) 平成30年度 運営指導委員の委嘱手続き

議長及び教育政策室から、資料5-1及び5-2に基づき、昨年度に運営指導委員を委嘱した方に、今年度も引き続き委員を委嘱することについて報告があった。

(6) 平成29年度 SGH管理機関等連絡会の概要

教育政策室から、資料6に基づき、すべてのSGH指定校の管理機関担当者を対象として平成

30年1月19日に開催された平成29年度 SGH 管理機関等連絡会の概要について報告があった。

(7) 平成30年度 SGH連絡会の概要

高橋委員から、すべてのSGH指定校を対象として、平成30年6月29日に開催された平成30年度 SGH連絡会の概要について報告があった。

(8) SGH 事業終了後の取組等

山本委員から、資料7-1に基づき、SGH 事業の取組等の継続に当たり新たに設立する「グローバル・リーダー育成基金」について報告があった。次いで、教育政策室から、文部科学省「Society 5.0 に向けた人材育成～社会が変わる、学びが変わる～」を踏まえた、高等学校への支援や高大接続に係る政策動向について報告があった。

② 第8回スーパーグローバルハイスクール特区教育センター運営指導委員会

日時：平成30年11月17日（土） 16：35～17：20

場所：附属高等学校2階会議室

出席者：石田、中島の各委員

オブザーバー：(SGHプログラム運営委員会) 柴田、山本、高橋、上地（事務局）氷見谷

議事

【協議事項】

(1) これまでのSGH事業の総括及び今後の展開

第5回SGH研究大会における公開授業等の視察の後、附属高等学校の山本校長からこれまでのSGH事業の総括及び今後の展開について説明があった。その上で、運営指導委員から指導・助言が行われた。

(2) 2019年度文部科学省初等中等教育局 概算要求主要事項

(3) WWL コンソーシアム構築支援事業 附属高校事業構想（案）

<主な指導・助言内容>

- ・SGH事業が始まった当初は、附属高校の教員や生徒の負担感の大きさが懸念されたが、試行錯誤を続けていく中でスムーズな事業運営や全校的な取組ができるようになったことは評価できる。
- ・文部科学省がSGH事業の次の取組として掲げる「WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアム構築支援事業」について積極的に検討を進めるなど、地域を先導するモデル校としての取組に期待したい。
- ・SDGsというテーマに関しては、それをビジネスチャンスととらえている企業を含めて、何らかの形でコミットしようとする組織・団体は多く存在する。しかし、どの組織とどのような連携を結ぶかということについては、組織の活動経緯や実績を十分に把握して慎重に判断されたい。
- ・企業からの支援を得るためには、税制面での優遇措置等も勘案しながら、後援会を組織することや企業向けのファンドを立ち上げること等が考えられる。一方、「トビタテ！留学JAPAN」等の国際的な活動に対して既に支援を行っている企業に対しては、重ねて支援を得ることは難しいのではないか。

- ・大学と附属高校との連携はますます重要になると思われる。WWL事業において求められる高校生国際会議の開催については負担も大きいと思われるが、金沢大学が有する海外ネットワークを活用できることは附属高校の強みであり、そうしたアドバンテージを活用した取組に期待したい。

③ 平成30年度 第9回スーパーグローバルハイスクール特区教育センター運営指導委員会

③-1 日時：平成31年3月15日（金），17：15～17：45

場所：石川県青少年総合研修センター 研修室

出席者：藤田委員，

オブザーバー：（SGHプログラム運営委員会）柴田，山本，高橋，塚田，上地（事務局）

③-2 日時：平成31年3月16日（土） 17：00～18：00

場所：金沢大学自然科学本館1階 応接室

出席者：石田委員

オブザーバー：（SGHプログラム運営委員会）柴田，山本，高橋，塚田，上地（事務局）

議事

【協議事項】

(1) SGH 事業研究開発完了報告書について

- a. 完了報告書，北信越フォーラムについての本校SGH推進委員長より説明した。
- b. 完了報告書，北信越フォーラムについての質問，意見，助言

(2) 次年度の以降の活動について

- a. 次年度以降のWWL申請についての本校校長より説明した。
- b. 次年度以降のWWL申請についての質問，意見，助言

(3) 総評

5年間の総括

6 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程												
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
地域課題研究	←						○	○		○		○	→
グローバル課題研究									←				→
グローバル提案「模擬国際会議」	←			○		○	○	○	○				→
グローバル・キャリアパス	←			○	→								
グローバル・ディスカッション							←	○	○	→			
北信越SGHフォーラム	←												→

○生徒発表，外部交流事業

## (2) 実績の説明

### ①研究開発単位Ⅰ 地域から世界へと発展する一貫した課題研究カリキュラム開発

#### ①-1 課題研究「地域課題研究」のカリキュラム改善

提案の現実性を担保するため、生徒・教員による評価のみならず、北陸財務局及びおよび日本政策金融公庫の全面的協力を得た。また、企業向けポスターセッションでは金沢市、北國銀行、地元商工会等から47名の参加者を得た。

#### ①-2 課題研究「グローバル課題研究」のカリキュラム開発

「グローバル課題研究」は、地域課題研究の研究手法を活かし、グローバル課題(SDGs)の中から選定しグループを形成、グループテーマ・個人テーマを設定し、ゼミ形式の指導のもと、課題解決学習を行う教師の専門性を極力活かすプログラムである。各教師は教科科目の内容とSDGsのカテゴリの対照を考察し、まとめた。次年度シンガポール・マレーシアに赴き、各自のグローバル課題解決案を、現地の人々に提案するための準備として、現地コーディネーターを介し協力校を選定。現地に赴き協力校との打ち合わせを実施した。

#### ①-3 課題研究「グローバル提案」のカリキュラム改善

昨年度は、「教員の指導体制」、「生徒の負担減」、「評価」、「スケジュール」に力を入れて開発してきた。今年度は、「生徒主体の授業づくり」を意識して開発を行い、生徒の意見を積極的に取り入れ、より多くの生徒が主体的に意味のあるものとして模擬国際会議を捉えて真剣に取り組むことができるかを念頭に置いて授業内容や方法を改善した。

その結果、議長は生徒が務め、論点やアウトオブアジェンダは生徒が決める。担当国や参加国数も生徒の主導によって決定し、最終的には一人1か国を担当し会議を実施した。その間、SDGsについて専門家から学ぶ機会を設けた。また、夏休みに2泊3日の東京現地学習を実施し、食糧安全保障の問題に関する意識を高めるために、国連機関や省庁及び企業などについて訪問した。

英語によるポスターセッションは実施しなかった。

#### ①-4 課題研究「グローバル・キャリアパス」のカリキュラム実施、改善

「グローバル・キャリアパス」については、例年通り、「学びの履歴書」「学びの設計書」からなるカリキュラムを本年度も実施した。

次年度SGHでなくなる現2年生においては、カリキュラムを改善し、2年の2学期から前倒しし、新たな「グローバル・キャリアパス」のカリキュラムを実施した。

### ②研究開発単位Ⅱ 課題研究の質を高める外部資源活用方法の開発

#### ②-1 課題研究「地域課題研究」における外部資源活用

- ・北陸財務局及び日本政策金融公庫の協力。
- ・6月の2回の授業で、ビジネスプランシートの作成方法等日本政策金融公庫のべ4人の方から指導・助言。
- ・7月27日・28日、加賀現地学習実施。グループごとにフィールドワーク、聞き取り調査。県内企業、公的機関、大学など計52機関の協力を得る。
- ・9月～10月の4回の発表において、北陸財務局職員のべ12名による講評・指導。
- ・11月17日の研究大会の際のクラス代表発表会において、北陸財務局3名、日本政策金融公庫2名、方々に評価・講評。

- ・11月27日 企業向けポスターセッションでは、県内の企業、青年会議所、地域の商工会、北陸財務局、日本政策金融公庫、金沢市役所などから47名の方々に講評・指導をいただく。
- ・1月12日 金大附属・金沢泉丘・金沢二水三校合同発表会では、金沢大学、関西学院大学、県内県立高校教諭32名が参加。プレゼンに対する講評を実施。
- ・1月～ 「地域課題研究」の提案に関して、提案した行政・民間企業などから19件の評価・助言をいただいた。

#### ②-2 課題研究「グローバル課題研究」における外部資源活用

- ・5月7日 SDGsに関する講演を実施。講師 SDGs パートナーズ代表取締役 CEO、元国連職員の田瀬和夫氏。
- ・7月24日 ACCU（アジアユネスコ文化センター）から篠田真帆氏を講師に迎え、教員向けの第1回SDGs研修会を実施した。
- ・12月14日 第2回SDGs教員向け研修会を実施した。講師：ACCU 篠田真帆氏

#### ②-3 課題研究「グローバル提案」における外部資源活用

- ・夏休みに7月31日～8月2日（2泊3日）の東京現地学習を実施。食糧安全保障の問題に関して様々な取り組みをしている国連機関や省庁及び企業などについて訪問し、具体的な世界の課題とそれぞれの機関の取り組みを知り、調査する場面を設けた。

【訪問先一覧】・日本科学未来館、・JST（科学技術振興機構）、・JETRO（日本貿易振興機構）、・農林水産省、・味の素、・JICA（国際協力機構）、・UNHCR協会（国連難民高等弁務官事務所）、・フランス大使館、・日本ユニセフ協会、・タイ大使館、・WFP（国際連合世界食糧計画）、・FAO（国際連合食糧農業機関）

#### ②-4 課題研究「グローバル・キャリアパス」における外部資源活用

- ・7月28日、「ひざ詰めディスカッション」において若手社会人・研究者など外部ゲスト25名の協力。

#### ②-5 英語科「グローバル・ディスカッション」における外部資源活用

- ・9月～11月、金沢大学所属外国人留学生を本校に招き、計6回の英語科「グローバル・ディスカッション」を実施、のべ55人の協力。

### ③研究開発単位Ⅲ 課題研究の基礎をなす既設教科の内容と方法の改善（教科のSGH化）

- ・公民科「新聞小テスト」。1・2年生は4月～2月、3年生は4月～12月実施。
- ・英語科「グローバル・ディスカッション」。1年生10月～11月実施。
- ・11月17日、第5回SGH研究大会で、国語科、地歴科、数学科、理科、保健体育科、英語科における「通常授業のSGH化」を授業公開及び整理会を実施した。

### (3) 成果の普及

本事業の成果発信については、第5回SGH研究大会（平成30年11月17日開催）、金沢大学Webサイト掲載（10月、11月、3月）、第1回北信越SGHフォーラム（平成31年3月15日・16日開催）、金沢大学Webサイト掲載（3月）、「平成30年度SGH研究報告書」（平成31年3月発行）等を活用し行った。特に、第5回SGH研究大会において、事業の趣旨及び取組について紹

介し、成果の普及に努めたほか、第1回北信越SGHフォーラムにおいて、金沢大学、北信越6校（アソシエイト校含む）の協力を得、県内外の教育関係者に本校SGH事業の成果を広く公開した。

企業向けポスターセッション（平成30年11月27日開催）、金大附属・金沢泉丘・金沢二水三校合同発表会（平成31年1月12日開催）が実施され、県内の各種企業、県内外の高校教員や金沢大学などの外部評価者に1年生の課題研究、2年生のグローバル提案のポスター発表を行い本校の成果を発信した。

#### ① 第5回SGH研究大会

本校第5回SGH研究大会は、高等学校・教育委員会関係者、大学関係者、報道・出版関係者など、111人（本校教員は除く）の参加者を得た。「グローバル提案」の公開では、模擬国際会議を同時に6カ所で開くなど、先進的な事例を示すことができた。また、「研究協議会」では、この5年間の総括と今後の方針について説明し、今後の研究の継続計画について忌憚のない意見交換が行われた。

#### ② 企業向けポスターセッション

1年生の地域課題研究の成果を、県内の一般企業など47名の参加を得て実施。提案に対する批評を受けるとともに、地域に本校の取り組みを広く紹介した。

#### ③ 金大附属・金沢泉丘・金沢二水三校合同発表会

評価者として県内外の高校教員や金沢大学、福井大学、民間企業、などから32名参加した。他の高校からは計64名の生徒が参加、本校の成果を発信するとともに、他校との有意義な交流が実施できた。

#### ④ 北信越SGHフォーラム

SGH6校及びアソシエイト1校の合計7校による種々のプログラムが実施された。生徒主体のプログラムでは7校から計46名の生徒が参加し、他校との有意義な交流が実施できた。また、シンポジウムでは、県内外の高校の他、石川県教育委員会の他、長野や岡山の教育委員会からの参加がみられ、「総合的な探究の時間」実施へ向けて、有意義な意見交換がなされた。

#### ⑤ 成果物・研究報告書刊行

- ・平成31年3月 「平成30年度 金沢大学附属高校SGH地域課題研究」
- ・平成31年3月 「平成30年度 金沢大学附属高校SGHグローバル提案」
- ・平成31年3月31日 「金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校スーパーグローバルハイスクール研究開発実施報告書第5年次」
- ・平成30年8月27日「金大附属高新聞 第257号」
- ・平成31年3月4日「金大附属高新聞 第258号」

#### ⑥ ホームページ

日本語版HPについては、本年度は、SGHのイベント的行事のみならず、課題研究の日常授業についても掲載した。その結果、一昨年13件、昨年31件であった記事数が本年度は、課題学習に関する記事だけで27件であった。英語版ホームページは、今年も本校のALTの協力で、ほぼ月に1回のペースでSGHの活動を紹介した。

#### ⑦ その他

- ・本校のSGH活動は群馬総合教育センター発行の「ぐんま高校教育新聞」に特集され、群馬県内に広く紹介された。

## 7 目標の進捗状況、成果、評価

＜添付資料＞目標設定シート

### (1) 目標の進捗状況

#### ①SGH 構想において実現する成果目標（アウトカム）

「a 社会貢献を自主的な自己研鑽活動」は486人と、目標を大きく上回った。これは例年通りのボランティア社会貢献活動に加えて、外部の大会に積極的に参加することを目的に生徒が自主的に組織した「SCHOLA」の活動は、趣旨から考えて十分に自己研鑽活動の一環とみなすことができると考えたためである。

「b 自主的に留学又は海外研修に行く生徒数」が26人と、目標の10人を大きく超えた。本年度の長期留学生在が5人である。この3年で42人が海外留学ないしは海外研修に参加している。

「c 将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合」は35%（1年生37%、2年生31%、3年生36%）であり一昨年までの6割近い数値からかなり下がった。6割というのがむしろ希望的数値であり、昨年度、本年度の数値の方が現実的な割合ではないかと考える。

「d 公的機関から表彰された生徒数、又はグローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数」は、81人と昨年に大幅に目標の30人を越えることができた。これは、「SCHOLA」の活動に加え、各教科のSGH化による各種全国コンクールへの応募推奨が大きくあずかっている。

「f 地域交流や異文化交流プログラムへの参加者」は昨年と異なり希望者のみが対象となったプログラムもあり、目標の240人に届かなかったが、200名は超えた。

#### ②グローバル・リーダーを育成する高校としての活動目標（アウトプット）

「a 課題研究に関する国外の研修参加者数」について、今年度は海外現地学習を実施しなかったため0人となった。これは、これまで1年生の3月に実施していた台湾現地学習の時期を、現1年生から2年生の1月に繰り下げたためである。行先も台湾からシンガポール・マレーシアに変更することが決定となり、今年度はその準備に充てたために海外現地学習は実施していない。

「b 課題研究に関する国内の研修参加者数」については227名である。1年生、生徒全員が加賀現地学習、2年生が東京現地学習を実施し、2学年とも国内研修となったため目標値を超えている。

「c 課題研究に関する海外大学・高校との連携」については、海外現地学習の不実施により今年度実際に連携した海外大学・高校は無かった。しかし、次年度以降の新たにシンガポール・マレーシア・タイ・中国(上海)の高校との連携に向けて準備を進めた。ただし、今年度、台湾師範大学附属高級中学校の生徒33名が本校を訪問し、交流会を実施し、また、台湾師範大学の学生も6名来校し、英語による交流授業を実施するなど、協力事業は実施された。

「d 課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ人数」は139人であった。4つの課題研究及び英語科「グローバル・ディスカッション」に、金沢大学教員・留学生、JAIST教員、台湾師範大学学生の協力を得ることができた。海外現地学習を実施しなかったため、それにかかわる大学生・高校生が無くなり、その分、人数が減少し目標値の200人に届かなかった。

「e 課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ人数」も、「地域課題研究」に対して北陸財務局と日本政策金融公庫の全面的支援を受けた他、52か所に及ぶ実地調査、さらに「グローバル提案」では各種機関で12人の方々、「グローバル・キャリアパス」に25人の協

力を得た。「企業向けポスターセッション」に47名、「金大附属・金沢泉丘・金沢二水三校合同発表会」では32名の方々に、合計116人となり、目標の50人をはるかに超えた。

「f グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会」には、昨年度と異なり1年生は全員の参加を必須とせず、希望者のみとしたため昨年よりは少し減少したが、一方で、他の大会に積極的にエントリーする生徒が増え245名と昨年に肉薄し、当初の目標200人をはるかに超えた245人が全国大会にエントリーした。

「h 先進校としての研究発表会」は11月17日に「第5回SGH研究大会」を実施し、また、1月27日は「金大附属・金沢泉丘・金沢二水三校合同発表会」も実施した。

「j 本校のSGH活動に対する学校訪問者数」は、「第5回SGH研究大会」には111人が参加、「企業向けポスターセッション」に47名、「金大附属・金沢泉丘・金沢二水三校合同発表会」には32名、「北信越SGHフォーラム」には10名が参加、それ以外の学校訪問9人、合計209人となった。

## (2) 成果と評価

### ①研究開発単位Ⅰ「地域から世界へと発展する一貫した課題研究カリキュラム」の深化、新たな試み

グローバル・キャリアパスは本年度で3回目となる。過去の反省を踏まえて、本校の3年生（70回生）に対して、今年度改善した点は以下のとおりである。

グローバル・キャリアパスは、1、2年時の活動に比べると地味で、生徒のモチベーションはあまり高くなかった。そこで今年度は、この活動の意味を、オリエンテーションで時間をかけて話をした。例えば、AO・推薦入試や一般入試の面接などに役に立つ、昨今のe-ポートフォリオの流れなど大学が求めている人材の変化を中心に話した。その結果、昨年度より生徒の取り組む姿勢が改善した。

ひざ詰めディスカッションでは、ゲストの方に、生徒からの質問を事前にまとめて送付した。その結果、ゲストとのディスカッションがスムーズに行われた。

今年度はSGH最終年度であることを踏まえて、2年生（71回生）に対しては、例年3年時の1学期に設定されていたが、前倒して、2年2学期から、まず自己の将来像を構想するために必要である「様々な進路を知る場面の設定を増やすこと」に力を入れてプログラムの開発を行った。また、グローバル提案の内容と並行して行うことで、自己のあり方を職業選択だけでなく、「考え方・生き方」へと広げられるような工夫も行った。

2年時の2学期まで実施した「模擬国際会議」の学びを一人ひとり生き方に落としとしていくように新たなカリキュラム開発を行った。例年3年時で行っている高校2年間の経験と学びを振り返る「学びの履歴書」はe-ポートフォリオの作成へとシフトしている。

評価については、「地域課題研究」、「異文化研究」、「グローバル提案」のいずれも昨年度で完成したルーブリックを用いた自己評価、相互評価、教員評価を実施した。

### ②研究開発単位Ⅱ 課題研究の質を高める外部資源活用方法の開発

昨年度に引き続き、北陸財務局の方、日本政策金融公庫の方々にお越しいただき、生徒のプレゼンの評価をしていただいた。「どのように改善すると、より現実的な提案になるか」について具体的に班ごとに指摘していただいた。

昨年度は、全グループを「ビジネスグランプリ（日本政策金融公庫主催）」に応募させた。しかし、

趣旨に沿わないテーマの研究も多くあったため、実社会で通用する提案をすることを念頭に置きつつも、今年度は指導のプロセスで日本政策金融公庫の方に、コンテストに相応しいテーマのグループを予め選抜していただいた。その結果13グループがビジネスグランプリに応募することとなり、北陸地区発表会に2グループが選出された。また、昨年同様、「地方創生☆政策アイデアコンテスト2018」（内閣府地方創生推進室主催）への応募もカリキュラムに取り入れた。

これらの結果、生徒の提案について実社会とのかかわりをより強めることができ、事後調査では、「地域や社会への関心が高まった」という生徒が77%と高い値となった。

「異文化研究」は、今年度の研究開発からは削除された。したがって、これまで続けてきた台湾師範大学附属高級中学へ本校生徒が訪問し、英語による交流事業は行わなかった。ただし、交流覚書に従って、12月に台湾師範大学附属高級中学生が33名本校を訪れ、交流会を実施した。

現1年生（72回生）は次年度以降SGHの指定終了となる。そのため、新たな国際交流のプログラムとして「グローバル課題研究」を実施している。「地域課題研究」と同様の手法で、現地学習で訪問予定のシンガポールやマレーシアを題材に、グローバルな課題（SDGs）を生徒自身の関心に沿ってゼミ形式で授業を展開している。その際、本校との連携協定を結んでいる ACCU（アジアユネスコ文化センター）に SDGs 課題研究の生徒向け研修会や教員向け研修会を実施してもらうなどのサポートをしていただいた。すでに平成30年7月（教員・生徒向け）・12月（教員向け）、3月（生徒向け）に、3回のSDGs研修会を実施した。

平成31年度（2年生）の1月にシンガポール・マレーシアに訪問し、現地企業や各種団体のご協力のもとフィールドワークや提案などを行い、生徒たちの探究活動をさらに深めていく。一部の生徒たちはこのゼミ活動で、シンガポールの学校（SIM）と共同研究を行う計画である。

「グローバル・ディスカッション」においては、今年度も金沢大学国際機構留学生センター等の協力で在籍留学生を確保する体制を継続することができた。

「グローバル・キャリアパス」では、若手ゲストとの「ひざ詰めディスカッション」を実施することにより、生徒に実社会を直接認識する機会を与えることができた。今年度、前倒しして2年生で新たに取り組んだ「グローバル・キャリアパス」では、東京現地学習による、企業訪問や、金沢を中心とする地元企業や大学、研究機関などの協力を得ることができた。

### ③研究開発単位Ⅲ 課題研究の基礎をなす既設教科の内容と方法の改善（教科のSGH化）

昨年の研修会で、本校SGH事業で目指す力は、教科外活動や「総合的学習」と共に教科SGH化の推進によって達成できることが合意された。今年度はそれに基づき、各教科で具体的な方法についてさらに研究を深化させた。

### ④分析的評価

本年度は、最終年度に当たり、指定3年目に1年生として入学した生徒（本校第70回生）が卒業した。そこで、資質・能力に関する同項目の3年間のSGH過程を経験した3学年、本校68回生（SGH第1期生）、69回生（SGH第2期生）、70回生（SGH第3期生）の比較および入学時アンケートと卒業時アンケート結果の比較をすることによって、本校のSGH事業を検証した。

アンケート項目は、1：新聞購読に関するもの、2：「総合的な学習の時間」や教科学習、行事、生徒会活動、部活動、自主的活動などに関するもの、3：自らの現状や将来像に関するものである。（アンケート項目は巻末に資料として添付）

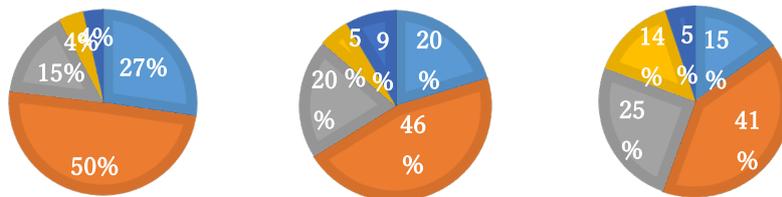
④-1 平成30年度末 学年比較 1年生(72回生), 2年生(71回生), 3年生(70回生)

\* 全体的に、学年による差はあまりないが、以下のような傾向が読み取れる。

- ・ 政治、経済や国際情勢に関する興味は学年を追うごとに高くなる傾向がある。
- ・ 地域の諸課題に関しては1年生の方が興味関心は高くなる傾向がある。これは課題学習のテーマが地域から世界へと広がるように設定されている影響であろう(資料1)。
- ・ グローバル課題に関してはどの学年も高い関心を示している。
- ・ 異文化交流に関しては1年生の方がやや高い関心を示している。これは今年度のプログラムでは海外現地学習が実施されず、多分に期待感が現れていると推測される。
- ・ “状況に柔軟に対応できる”と答えた生徒の割合は学年を追うごとに高まっている。学校生活の様々な経験が豊富なほど、対応力を身につけていると推察できる。
- ・ 国際化に重点を置く大学への、国際的職業への就職希望など国際化に関する質問では、学年を追うごとに低くなる傾向があったが、今年度は3年生でもあまり下がっていない。

資料1 2-1 地域の諸課題について、より関心を持つようになった。

■ 大いにあてはまる ■ あてはまる ■ どちらとも言えない  
 ■ あまりあてはまらない ■ あてはまらない



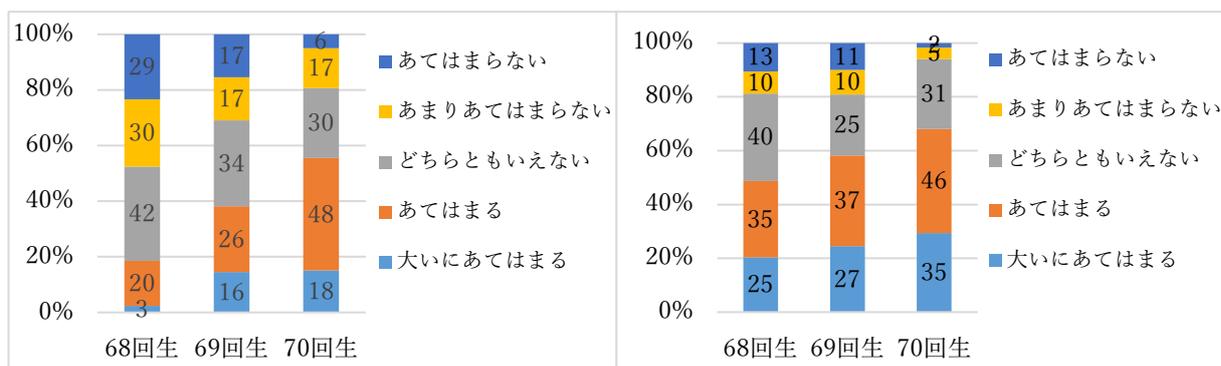
1年生 (72回生) 2年生 (71回生) 3年生 (70回生)

④-2 卒業時比較 68回生(SGH第1期), 69回生(第2期), 70回生(第3期)

\* 1の新聞購読に関する項目について回生の差はあまりないが、2および3の項目に関してはいくつかの項目で顕著な差が現れた。

- ・ 地域やグローバルな課題に対する関心はほぼ全ての項目で68回生より69回生、70回生の方がかなり高くなった。68回生はSGHに指定される前の入学だが、それ以降はそのことを認識した上で本校に入学している。その差が顕著に表れたのではないかと推察される(資料2)。

資料2 2-1 地域の諸課題に対して、より関心を持つようになった 3-2 いずれの職業についても、グローバル社会に貢献したい

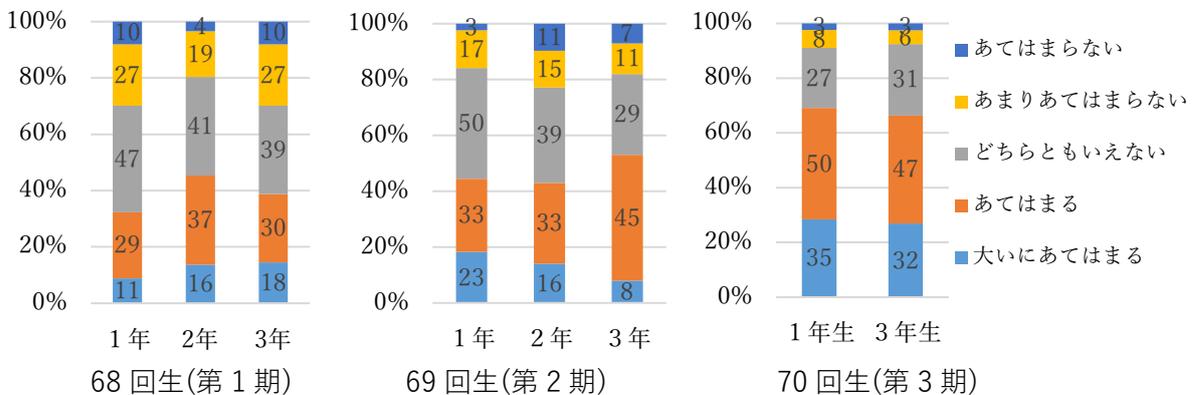


④-3 入学時アンケートと卒業時アンケートの比較（68 回生，69 回生，70 回生）

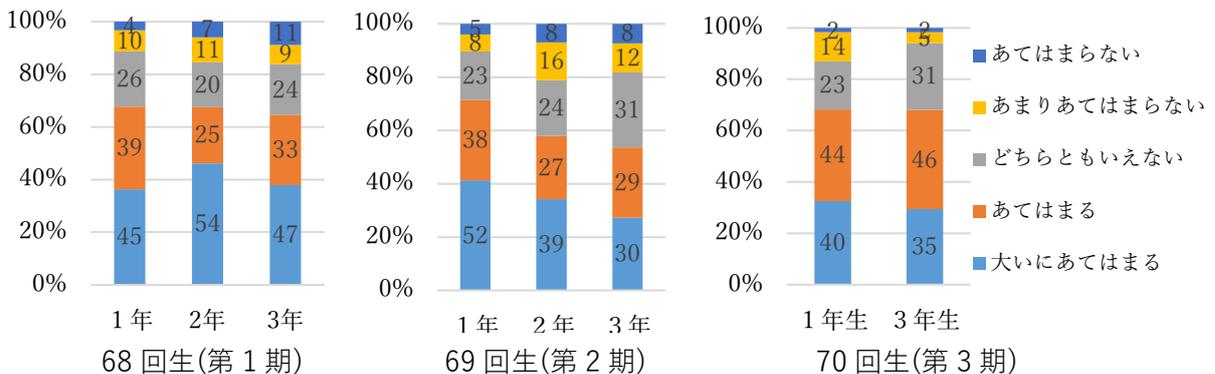
新聞購読を促す手立てとして、各クラスに複数の新聞を採り、配布した。また、毎週、新聞小テストを実施し新聞購読を促すように工夫した。しかし、新聞購読に関しては回生を追うごとに、購読する生徒が減る傾向がある。各クラス1部の新聞では全員が回覧するのが難しいこと。スマートフォンの普及により、それを利用してテスト対策をしてしまうこと等が原因と考えられる。こちらの施策が、新聞購読を促す働きをしていないと判断できる。新聞を採ることは、一定の、社会問題に対して興味関心を喚起することにはなっていると考えられるが、新聞購読を促すことには繋がっていないようである。

アンケート項目2・3に関しては特に大きな変化はないが、“自分はどんな人間か、十分に他者に説明できる”，“状況の変化に対して柔軟に対応できる”に関してはどの回生も、学年を追うごとに高くなる傾向がある（資料3）。逆に、国際化、異文化に関する質問項目では学年を追うごとに下がる傾向が共通している（資料4）。その理由は、全ての高校の活動によって、自己の能力や限界を知る機会が増えることやSGHプログラムの中で、数多くの自己表現の場を与えられていることと無関係ではないと考えている。一方で、グローバル化に関する質問項目で肯定的な割合が減少するのは、様々な学びや経験を通して、現実を知った結果、夢や希望が容易く手に入るものではないことを理解したと考えることができるのではないだろうか。逆に、それでも尚、グローバルを目指す生徒はかなり意志が固いと判断してもよい。海外現地学習を除き短期・長期の留学生が3学年で36人と極端に増えたのはその表れであると言えるのではないか。

資料3 3-1 自分はどんな人間か、十分に他者に説明できる。



資料4 3-3 異言語の人と積極的に交流・会話したい



## 8 5年間の研究開発を終えて

### (1) 教育課程の研究開発の状況について

研究開発単位Ⅰ「地域から世界へと発展する一貫した課題研究カリキュラム開発」及び研究開発単位Ⅱ「課題研究の質を高める外部資源活用方法の開発」を中心に報告する。

1年生前半までの「地域課題研究」、1年生後半実施の「異文化研究」、2年生実施の「グローバル提案」(模擬国際会議)、3年生実施の「グローバル・キャリアパス」という、「地域」→「二国間」→「グローバル」→「自己」と展開する一貫した課題研究カリキュラムを策定することができた。

研究開発単位Ⅱについては、「地域課題研究」では特に北陸財務局、日本政策金融公庫と連携して、指導や外部評価を受ける形を構築することができた。また、フィールドワークを通して、地域の自治体、企業などの協力を得る、夏の現地学習プログラムも策定できた。「地域課題研究」で作成した生徒の提案はすべて提言される仕組みを構築できた。「異文化研究」では台湾師範大学及び台湾師範大学附属高級中学校と連携協定を結んだ。これにより毎年1月に師範大学生数名が本校に来校する「Taiwan Hour」を実施し、3月には本校生全員が台湾に赴き、師範大学附属高級中学生と英語による異文化交流を進めるとともに師範大学生と台北フィールドワークを実施する、台湾現地学習プログラムを構築できた。「グローバル提案」については、今夏、東京現地学習において、JICA東京本部を始めとする国際機関や外務省・農林水産省訪問プログラムを実施した。また、SDGsパートナーズやユネスコ・アジア文化センターとの連携を結び、その指導を受ける仕組みができた。「グローバル・キャリアパス」では、本校卒業生を中心に実社会で働いている30歳前後の方々30人近くに來校していただき、生徒が作成した「学びの履歴書」「学びの設計書」について指導・助言を受ける「ひざ詰めデイスカッション」プログラムを策定することができた。

課題研究では、より適切な指導方法やルーブリックができた。また後述するように、各教科のSGH化で取り組んできた様々なアクティブ・ラーニングやルーブリック等の作成も、今後につながる貴重な財産となった。

### (2) 高大接続の状況について

現在、金沢大学を管理機関として策定したWWL構想調書の中で、より高度な内容を学びたい高校生のため拠点校・共同実施校の条件整備「Society 5.0時代に向けた人材育成」においても明記されている通り、ビックデータを活用した教育の質の向上のため、大学の人的リソースを活用し、連携機関とも協働した新たな科目を開設して高度な学びを提供する計画がある。

2020年度より開設予定・教科名：「数理統計サイエンスプログラム」(3年 1単位)  
・教科の目標:2年生までに得た課題研究や国際フォーラムでの発表、数学A-lympiadやGSCへの参画等を通じた学びを基礎とし、さらに深く追求するための特別プログラムとして開設する。データ分析、データ解釈、そのモデル化など、ビックデータを活用した高度な教育を大学の教員により提供し、ICT人材の育成を進める。なお、2020年の開設を目途とし、プログラム修了生には金沢大学として単位認定する。当初は拠点校の生徒10名程度から開始し、プログラムの検証と改善を繰り返しながら、順次受け入れ数を増やす予定としている。

### (3) 生徒の変化について

前出した通り、長期短期の留学を望む生徒が増加した。また生徒の自主的「SCHOLA」の活動が活性化し(資料5)、各種大会・コンクール参加数が激増した(目標設定シート:アウトカムb・d、ア

ウトプット e・f 参照)。その結果、積極的に SCHOLA の活動を支援する慣習が出来上がり、毎年、多くの生徒が対外的なコンクールやコンテストに参加できるようになった。また、主体的に英検を受ける生徒も増加し、準1級や1級の合格者もでてきた。

さらに、AO入試や自己推薦入試などアラカルト入試に、この5年、目に見えて応募する生徒が増えた。これは入試の後期日程の縮小と推薦枠・AO枠の拡大が背景にあることはもちろんだが、1・2の課題研究や3年の学びの履歴書・学びの設計書によって、自己分析が進み、単なる知識・理解の学力以外のアピールポイントを多くの生徒が認識してきたことが増加の理由の一つだと考えられる。

#### 資料5

主な SCHOLA 活動 (人数)

観光甲子園 (10)	神戸女子学院大学 絵本翻訳コンクール (10)
ドイツ語スピーチコンテスト (1)	全国ディベート説明会 (10)
小松サマースクール (5)	ブリガム・ヤング大学ハワイ校 全国高校生英語スピーチコンテスト (1)
物理チャレンジ (2)	模擬裁判選手権・中部北陸大会 (16)
科学グランプリ (2)	IMMC 数学モデリングチャレンジ (10)
エコノミクス甲子園 (16)	数学甲子園 (30)
全国高校教育模擬国連大会 (14)	TOBITATE 海外留学 (2) * 候補
上智大学英語弁論大会ジョン・ニッセル杯 (1)	科学の甲子園 (7)
社会福祉エッセイコンテスト (1)	A-lympiad (40)
ブリガム・ヤング大学 英語スピーチ (1)	ビジネスグランプリ (55)
金沢大学グローバルサイエンスキャンパス (6)	福井大学グローバルサイエンスキャンパス (5)

#### (4) 教師の変化について

研究開発単位Ⅲ「課題研究の基礎をなす既設教科の内容と方法の改善(教科のSGH化)」を中心に授業の大きな変化について報告する。

SGH指定3年目から特に教科のSGH化について研究を進めてきた。各教科がどのようなアプローチでSGHにコミットできるか検討した結果、各教科の個性や特徴を生かしながらアクティブ・ラーニングを取り入れたプログラムを実施するようになった。

英語科では「英語を使える」人材の育成を目指し、Speaking活動を充実させる、プレゼンテーション、ディスカッション、ディベート、チャットなどを積極的にとり入れた。

国語科では「みらいに必要な力を育てる」を目途として、雑誌の編集、文書検定等を取り入れた。

数学科では「社会に応用する数学的思考力の育成」を目標に、現実世界から課題を発見し数学的に考察し、解釈する数学的モデリングの授業を取り入れた。また、A-lympiad、数学オリンピック、数学甲子園など様々な数学的思考を育てる取り組みを行った。

理科では「科学的な思考力・表現力の育成」を目標に、生徒参加型のディスカッションを授業やクリッカーによる探究型課題解決授業、物理法則ポスターコンペ等主体的授業の試みが導入された。

地歴・公民科では「アクティブ・ラーニング」の充実が目標とされ、野外巡検や大学との連携授業、主体的・対話的な授業等の様々な試みが実施された。

(5) 学校における他の要素の変化について（授業，保護者）

① 前掲したように，研究開発単位Ⅲ「課題研究の基礎をなす既設教科の内容と方法の改善（教科のSGH化）」では生徒の自主的・対話的，で深い学びにつながるような様々なアクティブ・ラーニングの方法が実践され，日々様々な試みにチャレンジする活動が活発化した。

② 開かれた学校へ

この5年間で，金沢大学は勿論として，他大学，高等学校，台湾師範大学の学校関係はもとより，民間企業，公的機関，国際機関等，地元を始め国内外の多くの機関との連携・協力を推進できた。これは本校開校以来の大きな変化・成果とあってよい。

さらに，5回のSGH研究会のほかに，県立高校との合同発表会，この年度末に開催予定の北信越フォーラムなどを通し，多くの協力者・参加者を得たこと，金沢大学を始め，地域の教育界，全国の教育界に本校の活動を示す機会を得たことは，本校の存在意義を示す上でも重要なことである。これもSGH指定校による大きな成果ととっても過言ではない。SGHに指定され，本校の取り組む「地球サイズの教育」を前面に出すことによって，受験生・保護者・中学・塾に本校の特色がわかりやすくなったと評価されていることは成果の一つとあってよい。

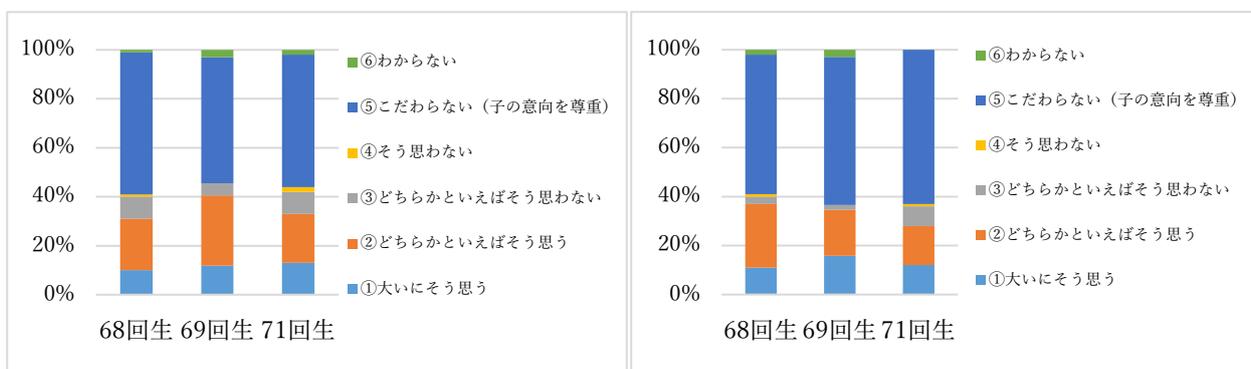
③ 保護者の評価

概ねSGHに関して肯定的である。「大いに期待する」「期待する」を合わせると，SGHの活動が，放課後の生徒の時間を奪うことをやや危惧する声もあるが，ほぼの項目でも9割以上が肯定的に受け止めている。ただし，高校卒業後の海外留学や将来国際的な場で活躍を求めるかという問いに対しては，半数以上がこだわらないと答えている（資料6）。

資料6

\* 高校卒業後，海外に留学させたい。

\* 将来，国際的な場で活躍させたい。



(6) 課題や問題点について

SGH事業の課題や問題点に関しては以下の3点に集約できると考えている。

- ① SGH活動が基礎学力の向上とは直結しない上，評価をフィードバックし難く，生徒も教師もモチベーションを維持するのに腐心したこと。教師側としても，教科の違いや担任かどうか等立場の違いによって，熱の入れ方にも大きな差ができたことは否めないこと。
- ② 課題解決学習を進める上で，学習方法は文理共に学ぶべきものがあるが，取り上げるテーマ・内容が文系的なものが主で，理系には興味関心を持ちにくいものが多かったこと。
- ③ 事務連絡や諸手続きをはじめ，雑務が多く，教員の負担感が大きくなったこと。

(7) 今後の持続可能性について

今年度、金沢大学学長より附属高校の役割として「先導的実践研究をすること」が、また有識者会議では「学校ごとに、国立大学の存在意義・・・特色を明確にする」こと、さらに全附P連では「現代的教育課題にこたえる必要」があることなどが提言された。これを受けて、SGH 指定解除後も、「地球サイズの教育」を推進し、様々な教育研究の発信校足る必要を強く自覚し、先導的実践研究することが、本校の役割であることが校内で確認されている。

SGH 指定後については、この5年間の反省を生かして、新たな教育課程を再編し、すでに「グローバル課題研究」は試行実施されている。また、新しい海外現地学習の在り方を模索し、すでにシンガポールやタイとの協力校提携に向けて動き始めている。

今後も実践研究を継続する際、最も重要なのが教員の負担感を緩和することである。教員の負担感を緩和するためには、まず人的支援が必要である。諸手続きをする事務員を始め、英語で交渉ができるコーディネーター、英語の論文指導要員などの採用が無ければ教員の負担はかなり厳しく、継続は難しいと考える。アウトソーシングできるものは外に出す。それなくして継続は難しいと考える。さらに、人的支援に加えて、さらにそれを賄う経費を捻出する必要がある。この先、国からの支援が無くなった場合でも自走もできることを視野に入れる必要がある。

そのために、昨年、金沢大学に「金沢大学附属高等学校グローバル・リーダー育成基金」を立ち上げることができた。現在、基金の集まりは順調で、財源にかなり見込みができています。また、金沢大学からの特別な支援も約束されており、経費の面で憂慮する事態を回避できる可能性が高い。したがって、今後も、グローバル人材育成の様々な試みの持続可能性は非常に高いと考えている。

**【担当者】**

担当課	金沢大学人間社会系事務部総務課	TEL	076-226-2182
氏名	福井 彩子	FAX	076-245-8630
職名	附属学校事務係長	e-mail	edfuzo1@adm.kanazawa-u.ac.jp